
I S 〈インフィニット・ストラトス〉 朱い翼の飛翔

ブラスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISへインフィニット・ストラトス〈 朱い翼の飛翔

【Nコード】

N6058Y

【作者名】

ブラスト

【あらすじ】

IS―インフィニット・ストラトス―という女性にしか扱えない『兵器』が世界に浸透して数年。

女性しか扱えないはずのISを、扱える男性が二人、出現した。

二人は、IS学園へと入学し、その学園で波瀾万丈の学園生活を送ることとなる――

序章―朱い翼の卵―（前書き）

I Sを読んでから、衝動的に書きたくなった。後悔はしていない。

序章―朱い翼の卵―

IS―正式名、インフィニット・ストラトス―がある一人の科学者に発明されて数年、社会情勢は大いに揺れた。

男尊女卑の世界から一気に女尊男卑の世界へとひっくり返し、今では女であるだけで『偉い』となるまでになってしまった。

なぜなら、ISは『女にしか使えない、強力な兵器を武装するもの』だからだった。各国はISが軍事利用されることを危惧し、『アラスカ条約』を結び、ISは『兵器』から『スポーツ』のものへと変化した。

そして、ISを使用する者が通わなければならないのが、ここ、IS学園である――

「――と言うことだ。……聞いていたか、織斑？」

「…………聞いていましたが、理解出来ません」

スパアンツ！

いい音を鳴らしながら、織斑先生は俺の隣にいる奴——織斑一夏を出席簿で叩いた。

「はぁ……………いいか、ISは使い方を誤れば兵器にもなってしまう危険なものだ。最低限、この位は理解しろ。いや、理解しなくても覚えろ。いいな？」

「……………はい」

そんな事があった後、一夏は俺を恨めしげに見つめた後、織斑先生の方を向いて真剣に取り組み始めた。

……………しかし、皆さんはお気づきだろうか？

……………一夏と俺、玉城朱汰が女たまきあけたしか動かせないはずのISの授業を受ける——IS学園に入学してしまったことを。

あれは、一ヶ月程前、一夏がテレビで報道された時である。

「ブフォッ!? い、一夏!?!」

「ちょ、兄貴汚い! あたしもびっくりしてるのに……………」

「す、すまん」

俺は妹の花梨^{かりん}と家で昼食中にその報道を聞き、向かい合って食べている花梨に吹いてしまった。

しかし、仲が良かった奴がいきなりISに乗れるなんて報道を聞いたら、吹くに違いない。

「にしても……………一夏兄、ISに乗れるんだ……………」

「みたいだな、なんであいつだけ色々……………俺も乗ってみてーな
ー……………」

「兄貴なら行けるんじゃない？ほら、髪の毛括れば女の子」

「俺のコンプレックスを弄るな！」

余談だが、俺の顔は中性的……より、少し女子寄り（……）だ。故に、今まで何回も女と間違えられたことがある。……だからと言って、ISに反応するわけないだろ……そう思いながら、俺達は昼食を食べ終え、俺は妹に一言掛ける。

「んじゃあ、俺は束さんのところに行ってくるわ。帰りは多分遅れる」

「わかった。ほら、さっさと行ってきたら？」

「おう。んじゃな、花梨。」

そう言い、俺は束さん——ISの産みの親——に会いに行った。

「束さーん、来ましたよー？」

俺は、山奥にある、少し開けた場所に到着すると、少し大きな声で束さんと呼んだ。

本来、束さんは世界各国から指名手配される程の人物なのだが、あの人はそれを逆手に取り、日本に潜んでいるのだ。

俺が声を掛けると、広場にあった地面から生えているウサ耳が、地響きと共にせり上がり、そこには、エレベーターらしきものがあった。

「さて、と。行きますか」

俺がエレベーターに乗り込むと、物凄い勢いで下降していく。最初はビビったが、今では何ともない。

そして、十数秒経った頃、エレベーターが停止し、扉が開いた。

「束さん、来ましたよ？」

「おおーっ、流石たーくん！束さんのお願いを聞いてくれるのはたーくんしかいないっ！」

「それ、自業自得なんですからね？」

僕が声を掛けると、前方にいたウサ耳がこちらを向きながら笑った。
そう、この方がISの産みの親、篠ノ之束さんだ。しののたばね

「いやいや、それでも来てくれてるたーくんがいるから良いのさ!」

「そうですか……で、今日の用件は何ですか?」

俺はすぐさま束さんに本題を聞いた。そうでもない限り、終わる気がしないからだ。これは体験談。

「えーっとねえ、いっくんがISを起動しちゃったから、たーくんも起動できるかな? と思ってね。女の子みたいだし」

「俺のコンプレックスを………!」

正直、何回か蹴り飛ばしたくなった。訂正、蹴り飛ばした。

「いたたた……ま、それも実験するんだけど、本題は束さんのプロテクトをたーくんに突破してほしいのさ!」

「……………ついにバーチャルでもマゾに目覚めましたか」

「違うよ!?!」

そう思われてもおかしくは無い、と思う。

「もしかしたら、束さんが作ったプロテクトを悪用されるかもだから、一回、束さんのハッキング能力を”越える”たいくんをお願いしたいんだ!」

「……………はあ、わかりましたよ。何処ですか?」

「ん、準備するから待ってー!」

そう言って、物凄いスピードでキーボードを叩き始める束さん。さつき、束さんが「束さんを”越える”ハッキング能力を持つ」と俺の事を言ったが、これは毎回毎回俺のパソコンにハッキングしてくる束さんを返り討ちにするため磨いてきた技術の賜物だ。そのおかげで世界に注目されてしまった。

「……………よし、できたー!いくよ、たいくん!」

「いきなりかよっ!？」

そう言って、俺は目の前に広がる^{おびただ}夥しい量の数とアルファベットを崩しにかかった。

「つ、疲れた……………」

「三分…………だと…………? たーくん、腕を上げたね…………!」

俺は久々に本気でプロテクトを崩しにかかり、三分で束さんが作りあげたプロテクトを崩壊させた。

「……………^{トラップ}罠、多過ぎる……………」

「そういいながら、全部回避したじゃない……………」

本当にきつかった。ちょっと抜け穴っぽいところ見つけたら罠だった、というのが何個も。

「流石たーくんだねえ……………」

「俺にしか解けませんよ、あんなもの……………」

そう言って、俺は手元にあった赤色の翼を象ったであろうネックレスに触れた。

瞬間。

「な——ッ!？」

「たーくん!？」

ISのスペック、操作方法、武装、バスのロット、様々なISの情報が俺の頭に流れ込んでくる。それが当たり前の事のように。

「た、束さん……………まさか……………」

「うん、たーくんは、ISを起動出来るみたいだね……………」

……………この後、俺は数分間パニック状態に陥った。

序章―朱い翼の卵―（後書き）

原作一歩手前。束さんは準ネタ要員になるかもしれない………（汗）

第一話―悪いが、沸点は低い―（前書き）

うちのオリ主がなかなか暴走します、そして一夏が空k（

第一話―悪いが、沸点は低い―

「……………」

「……………一夏、大丈夫か？物理的と、精神的に」

今は一時間目が終了した直後の休み時間。一夏は終了と同時に頭を机につけ、オーバーフローしたように頭を横に振っている。

「まあ、仕方ないわな。あんなデカイ物を古い電話帳と間違えて捨てしまったミスをしてたらそりゃそうなるわ」

「少しくらい、慰みの言葉でもかけてくれよ……………」

「だが断る」

一夏の願いをすぐさま拒否し、一夏の肩を叩いていると、横から声が聞こえてきた。

「ちょっと、いいか？」

「え？」

「ん？」

俺と一夏は同時に声がした方を向く。すると、見違える程に綺麗になった幼なじみがいた。

「……………箒？」

「……………だな。」

「……………すまん、玉城。一夏を借りて行くぞ」

「ああ、分かった」

「ん？朱汰と一緒にじゃ駄目なのか？」

毎回の如く、ふざけたことをぬかしている一夏を一発叩いてから早く行けと手で示す。一夏も感づいたのか、箒の手を取って教室を出て行った。……………箒の顔が赤かったのは見間違いでは無い。

「……………あいつも、気付いてるんだろうがな……………」

そういいながら、俺は机に突っ伏そうとした時、新たな声が俺に掛かった。

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

俺が視線を上げると、そこには金髪青眼の『今時』の女子がいた。
あ、今時ってのは『高圧的』って意味ね。

「まあ！この私にわたくし話し掛けられたことだけでも名誉なのに、なんで
すのその態度は！」

「この私？ああ、そういやアンタ、イギリスの代表候補生だったな。
名前は……………」

「セシリア・オルコットですわ！私を代表候補生と知っていながら、
そのような言動をするのですか！？」

……………ヤバい、キレそうだ。俺は、こういう輩がやから苦手だ。事実、こ
ういう輩に絡まれた場合、基本的に返り討ちにしていることの方が

多い。

「代表候補生〓偉い、って訳でもないだろ。それとも、自分だけが特別とでも思っているのか？」

「なっ!?! あなた、私がエリートだと言うことを分かってないのですか!?! はあ、これだから極東の猿は………」

——俺の中で、キレた。よし、言葉責めだ。

「極東の猿、か。ならその猿と同じ人種の猿がISを作った事になり、それを貴女様が使っていることになるな？」

「なっ!?!」

「それに加え、ここの先生の大半は貴女様から言う極東の猿になるな? なら猿から学ぶことなんか無いだろうに、なんでここに来てるんだ?」

「あつ、あなた、いい加減に——」

オルコットが何かを言いかけた時、タイミングをはかっていたよう

にチャイムが鳴った。

「くっ……………！覚えてらっしゃいな！」

「忘れた」

オルコットが何か言ってきたが、スルーしておく。まあ、織斑先生が来たからなのだが。

「あ、一夏と箒が遅れた」

「すみません、遅れ——」

スパパアンツ！

「遅れた罰だ、織斑、篠ノ之」

「……………ご指導ありがとうございます」
「……………すみません」

大丈夫なのか、あれ？

二時間目が終わり、俺は一夏に慰みの言葉をかけると、トイレまで廊下を疾走し始めた。教室の近くにトイレが無いんだ………！疾走中に織斑先生に会ったが、分かっていたくれたのか、目をつぶってくれた。ありがとうございます、織斑先生！

「どうなってんだ？」

俺はなんとかチャイムが鳴る前に教室に戻ってることができた。そしたら、教室内の一角（一夏の席の近く）がオルコットと一夏によって煩^{うる}くなっていた。

「なあ、えーつと………のほとけ布仏さん？どうなってんの、あれ？」

「ん〜？あ、たっきーだ〜」

「俺はどこぞのアイドルか」

「それでも通じると思うけどね〜。あれは、せっしーがおりむーに
いろいろ勝手に言ってるだけだから気にしないでいいよ〜？」

「そうか、ありがとう」

い〜よ〜、と 最後まで気の抜けたような言い方で説明してくれた
布仏さんには感謝だな。

そう思った時、チャイムが鳴り、オルコットは自分の席に戻って
いった。やっと自分の席につける………

どうやら三時間目は織斑先生の授業のようだ。先生である山田先生

でもノートをとっている。中々重要な事なのだろう。
しかし、長年あの束さんに付き合ってた俺には眠くなる程の知識であった。

「そういえば、再来週にあるクラス対抗戦のクラス代表を決めないとな」

「クラス代表？」

一夏が首を傾げると、織斑先生が補足してくれた。

「まあ、簡単にいえば学級委員だ。生徒会とかの召集にも行かなければならない。なお、一度決まれば一年間変わることも無い。さて、立候補、もしくは推薦はいないか？」

クラス内が一瞬静かになった。

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

すぐに一夏を推薦する声が聞こえる。まあ、男だしねえ。色々と興味津々なんだろう。…………あれ？じゃあ、まさか俺も…………？

「んーと、あたしは玉城くんを推薦するね」

「やっぱりか！」

俺は机に頭をたたき付けながら避けられぬ状況を嘆いた。

「ふむ、候補者は織斑一夏、玉城朱汰の二名だな？他にいなければこの二人のどちらかになるが？」

「お、俺！？」

ガタン、と音を立てながら一夏が立ち上がり抗議する。

「すみません、織斑先生。俺は辞退」「辞退は許さん」……………はい………」

一夏は織斑先生の一撃の下にノックアウトされ、うなだれながら席についた。

「よし、では、この二人で模擬戦をして代表を――」
「待ってください！納得がいきませんわ！」

織斑先生の言葉を遮って机を叩きながら異論を唱えたのは、あの金髪ドリ……………オルコットだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……………キレていいかな？

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿共になされては困ります！私はこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

よし、次何か言ったらキレよう。一夏も癪になってるみたいだしね。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！」

自信過剰もここまで行くと素晴らしいな、あ、織斑先生の顔が若干引き曇っている。……………ヤレと言ってるのかな？

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこつ自体、私にとっては耐え難い苦痛で——」

プチン。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「つかイギリスも島国だろうが、こっちからしたらそっちは極西の猿だ」

「な——！？」

ちょっと気が晴れた。織斑先生も薄く笑いを浮かべている。

「あ、あなた達！私の祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのはそっちだろうが」

「ッ……………決闘ですわ！」

オルコットが決闘を申し込んだので、俺は簡単に承諾した。

「おう、そっちの方が四の五の言うより簡単だ。で？ ハンデはどうする？」

「そうですわね。代表候補生たる私にハンデを設けるのは当然――」

「何言ってるんだ？ 俺がどんなハンデを付ければいいかって聞いているんだ」

途端、クラス中に笑いが巻き起こった。

「ちょっと、玉城くん、それ本気で言ってる？」

「男が女より強かったのって大昔の話だよ？」

クラスの皆から馬鹿にしたような言葉が掛けられる。箒と一夏を除いて、だが。

「お、おい朱汰。いくらお前が”アレ”だからって大丈夫な訳が無いだろ？」

一夏が俺に小声でそう聞いてくる。だが、その心配は無用なのだよ！

「確認済みの事だ。”アレ”とISは殆ど同じ、むしろISの方が使いやすいから問題無い」

俺はそう小声で一夏に言うのと、一息ついてから話し出した。

「えーっ、と……………オルコット?」

「なんですか?」

「……………ハンデを貰わないと、多分、だが蹂躪されるぞ?」

「なっ!?!」

「「「えっ!?!」」」

オルコットとクラスの皆が驚愕の顔をする。一夏め、余計な事をしやがって……………

「フ、フフフ……………いいでしょう、本来なら私がハンデをつけてあげようと思いましたが、ハンデ無しでズタボロにして差し上げ

ますわ……………！」

「わかった、ボコボコにしてやるよ！」

俺がオルコットにそう宣言すると、織斑先生が手を叩いて言った。

「では、来週の月曜日の放課後、第三アリーナで模擬戦を行う。玉城、オルコット、織斑は準備をしておくように」

「あ……………忘れてた」

一夏が哀れな子羊に見えた。

第一話―悪いが、沸点は低い―（後書き）

伏線を立てましたが、ストーリーにあまり関係ありません（

第二章―特訓、V・S―（前書き）

少し短い上、ご都合主義な状態に……！

では、第二章―特訓、V・S―をどうぞ！

第二章―特訓、V・S―

「……………」

「だ、大丈夫、か…………？」

放課後。俺は授業が終わってからずっと頭から煙を出し続けている一夏に声を掛けた。本当に煙が出ているから心配だ。

「わ、わからん……………もっとしっかりしておくんだった……………」

「……………そりゃあ、な……………」

一夏に同情していると、山田先生が走って教室に入ってきた。

「あ、織斑くん、まだ居たんですね。」

「山田先生、どうしたんですか？」

一夏が先に反応したため、一夏にこの事について任せよう。俺はこ

の後、こいつを連れていかなきゃならん。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って一夏に部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。
あれ？

「俺と朱汰の部屋は決まっていんじゃないじゃなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「俺もですよ。それに、一夏だけなんですか？」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理矢理変更した上、まだ後一人分用意出来て無いんですよ。――二人とも、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

山田先生が最後の方の言葉だけ耳打ちしてきた。俺達は二人して首を振る。てかまず政府の話は聞かないようにしてる。マッドな奴らにモルモットにされかけたからな。

「そう言うわけで、政府特命もあってとにかく寮に入れるのを最優先してみたいです。朱汰くんは一週間もすれば仮の部屋が、二人とも一ヶ月もすれば新しい部屋の方が用意出来ますから、しばらくは我慢してください」

「はい、分かりました」

「…………あの、山田先生、耳に息がかかってくすぐったいんですが……………」

俺は普通に了承の意を示したが、一夏はなんかやりやがった。鈍感か、こいつは。

「あつ、いやつ、これはそのつ、別にわざととかではなくてですねつ……………!」

「いや、分かってます。一夏、それは言っではいけない事だト阿呆」

「うつ……………それで、部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備出来ないですし、今日はもう帰っていいですか?」

「あ、いえ、荷物なら——」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

ターミネーターの曲が流れる。勿論無意識に。織斑先生にあったことがある人は絶対流れるようになる。いい例が俺だ。

「ど、どうもありがとうございます……………」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

なんとも大雑把。一夏が潤いを求めているのが目線でわかる。……………
…そしてそれが無駄な事も。

「玉城。お前はここの近くのホテルを用意してある。荷物を届けてはあるが、他に必要な物があれば自分で取りに帰れ。これが部屋のキーだ」

織斑先生が俺にキーを投げてよこしてきた。危なげもなくキャッチし、俺は山田先生からいろいろと話を聞いている一夏を見て、織斑先生に話し掛けた。

「織斑先生、後でこいつを鍛える為に、こいつを俺の家に連れていきますけど許可もらえますか？」

「お前の家だと？……………ああ、成る程。確かお前は”アレ”でIS

の動かし方が分かるんだったな。……一時間なら許可する。動かし方の他にも、やらなければならん事が沢山ある」

「ですよ、俺は空手やってましたから大丈夫ですけど……」

俺は織斑先生に許可を貰い、説明を受け終えた一夏に話し掛けた。

「おーい、一夏。まだ時間あるだろ？一時間、”アレ”やりに行くぞ」

「え、”アレ”使っているのか？……つか許可は」

「もう貰った。さ、行くぞ！」

俺は一夏にそう言ってから、走り出した。

「あ、待ってくれよー！」

……女子がついて来て怖いんだが、なんなんだ？

「着いたぜ、我が家！」

「久しぶりだなー、お前ん家に来るの？花梨ちゃん元気か？」

「ああ、元気元気、むしろ有り余ってるよ」

俺達はIS学園から程近い、駅前のアパートまでやってきた。そう、俺の家だ。あ、ついて来ていた女子は織斑先生に見つかって可哀相でした。

「さーて、一時間だけ許可をもらってるからさっさとやるぞ」

そう言い、俺は家のドアを開けた。

「花梨ー、ただいまー」

「失礼しまーす」

「あれ、一回帰って来たの、兄貴？……あ、一夏兄っ！」

「やあ、花梨ちゃん。久しぶりだね」

リビングまで行くと、花梨がエプロンを着て夕食の準備を始めていた。そして、一夏の姿を見ると、すぐさま一夏に飛びついた。……：言うまでもないが、花梨は一夏にホの字だ。でも、箒という強力すぎる幼なじみがいるため、付き合うことは諦めているらしい。そうは思えないが。

「おっ、と。花梨ちゃんは元気みたいだね、朱汰からは元気だって聞いてたけど」

「まあ、健康的な体ですから！」

一夏の言葉に、無い胸を張って答える花梨。

「兄貴？今失礼なことを考えなかった？」

「気のせいだ」

どうやら心を読まれたらしい。何故バレたし。

「さて、一夏。そろそろやるぞ。ついて来いよ」

「おう。じゃあね、花梨ちゃん」

「あ、あのISモドキをしに来たのね。頑張ってー」

花梨は大袈裟に俺達に手を振った。そして、俺達は俺の部屋に入っ
た。

「うわあ、この頃片付けて無かったからなあ……………」

「……………もうちょっと片付けろよ……………」

俺の部屋はもうそれは惨劇と言っていいほどに散らかっていた。主に機械系で。

「さて、一夏。始めるぞ？」

俺はそう言って、机の上に置いてあったヘッドギアと、体全体につける電気信号を読み取るパッチを一夏に手渡した。

「これは？」

「それが、東さん特製ISシミュレータ、『Virtual・Stratus』ヤル・ストラトスの起動とかに必要なものさ。それ付けたらすぐに開始するぞ」

そう言って、一夏の体にパッチを引っ付けていく。一夏にヘッドギアを被せ、俺はパソコンにある『V・S』のアイコンをダブルクリックした。

「おおっ！？ いきなりアリーナみたいな画面に切り替わったぞ！？」

「ああ、それがV・Sの画面だ。自分視点でISの動きが出来る。試しに、空中に上がるイメージをしてみろ」

「分かった」

一夏に素早く指示を回すと、一夏はすぐさま行動に回す。

「……………うーん、上げれる事には上がったけど、遅いな……………」

「最初はそんなものだ。空中旋回とかもしてみろ。その後、武装展開の練習だ。それだけやったら充分だ」

「ん、了解」

実際、一夏にV・Sをさせるのはこれが最初で最後の機会だ。ISよりも動かし辛いこっちで慣れとけば、ISでも上手く行くだろ。

「……………おわっ!」

「どうした?」

「壁に当たった……………」

「……………当たらないで二周しようか」

この後、三十分近くをこの空中旋回に費やし、武装展開の練習をし

ただけで終わった。

「大丈夫なのか……………」

「無理にやるよりマシだろ。箒辺りにまた体を動かすのを手伝ってもらえよ」

「へ？なんでだ？」

「…………勘とかって、なかなか役立つぞ？」

「ふう…………重かった……………」

俺は織斑先生に手配してもらったホテルの部屋に、パソコンとV・Sを持ち込み、ベッドへと倒れ込んだ。

「……………オルコットに宣戦布告みたいなことをしちまったが、あいっ、代表候補生なんだよな……………」

俺はそう呟くと、飛び起きてパソコンを立ち上げた。

「さて、徹っっ底的に調べ尽くしてやりますか」

俺のハッキング能力、なめんなよ？

第二章―特訓、V・S―（後書き）

一夏の操縦技術はこんなもんです。ここで練習したからセシリア戦で動けた………んだと思います、多分（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6058y/>

IS 〈インフィニット・ストラトス〉 朱い翼の飛翔

2011年11月24日16時52分発行